

2. 南山大学国際化推進事業（第二期）国際シンポジウム 「東アジア・キリスト教研究の課題と展望」

村山由美

MURAYAMA Yumi

南山大学国際化推進事業（第2期）「現代東アジアにおけるキリスト教研究の課題と展望」の研究の一環として、2015年1月31日、南山宗教文化研究所において国際シンポジウム「東アジア・キリスト教研究の課題と展望」が開催された。前日から南山研修センターで開催されていた、東アジアキリスト教交流史研究会から合流した参加者も多く、当日は活発な議論がかわされた。発題は過去三年間に懇話会で講演をした三名の研究者、徐亦猛氏（福岡女学院大学准教授）、李省展氏（恵泉女学園大学教授）、森本あんり氏（国際基督教大学副学長）が担当し、「東アジアにおけるキリスト教」のテーマについてそれぞれの専門分野から発言した。発題への応答として、佐藤千歳氏（北海商科大学准教授）、洛雲海氏（韓国・長老会神学大学校 [PUTS] 助教授、聖学院大学総合研究所客員教授）、寺尾寿芳氏（聖カタリナ大学教授）がコメントした。

徐亦猛氏は、「中国におけるキリスト教研究の課題と展望」と題して、中国におけるキリスト教の「本色化」(indigenization) について、歴史学的考察を述べた。本色化とは外来の宗教が現地の文化と融合・結合し、現地の文化となることであると定義される。西洋の宣教師あるいは文化を媒介とした「洋教」であるキリスト教が中国の社会で広められるためには、中国文化との結

合と融合が不可欠であり、そうでない場合はキリスト教の「真髄」は理解されないであろうと徐氏は述べる。しかし、一方で中国文化と融合・結合した場合にキリスト教の「本質」が見失われるのではないかという宣教師側の懸念もあり、また、キリスト教を受容する中国の人々の側でも、キリスト教信仰を受け入れることはすなわち西洋文化をも受容することになるのではないかという疑念が生まれ、近代中国の多くの人々はキリスト教を拒絶したという。徐氏はキリスト教伝来から今日にいたるまでの中国におけるキリスト教の歴史を「本色化」という観点から振り返り、「本色化」の必要性と可能性を模索した。その歴史的概観の中でも注目すべきは、今日の中国におけるキリスト教理解に決定的な影響を及ぼしていると考えられる、近代プロテスタンティズムの植民地主義性格である。アヘン戦争で西洋列強に敗北した中国では、西洋文明の宗教としてもたらされたキリスト教に対する反発が顕著であり、反キリスト教・反宣教師の風潮が高まる中、中国のキリスト教会において本色化という課題が緊急性を持って意識されるようになった。近代中国の文化人・知識人がキリスト教を非科学的、非理性的、そしてなによりも帝国主義的文化侵略の道具であると批判したとき、中国のキリスト教知識人は「本色化運動」を提唱することによって、それらの批判を乗り越えようとしたのである。そして、その運動は、儀礼、神学、実践におよび、方法については教会指導者の間でも意見が分かれ

るところとなった。単純化して言うことがゆるされるならば、中国文化のキリスト教化なのか、キリスト教の中国化なのかという議論である。

しかし、徐氏の議論の中で見落とされてはならないのは、「本色化」が神学的問題であると同時に政治的問題であるということであろう。そして、それは中国という特殊な地域における歴史的な文脈の中で具体的に議論される必要がある。本色化運動の精神は1949年の中華人民共和国成立以降も、「自治、自養、自伝」を理念として掲げる三自愛国教会に受け継がれていく。そして、政府の宗教政策の緩和によって、1979年以降は信徒の数は激増したといわれる。徐氏はその事実を、キリスト教と中国文化の融合を異文化理解と異民族統合のモデルとして積極的に評価し、中国における民族主義的キリスト教を推奨しているように思われる。

それに対してコメンテーターの佐藤氏は、現在の三自愛国運動では「キリスト教中国化」に力点が置かれている状況を踏まえ、何を以て「中国的」とするのか

という解釈権を「共産党政権が握っている」という政治状況を指摘する。そして、体制外教会における「本色化」の例を挙げ、彼らが、世俗権力と距離を置きつつも、「キリスト教をどうやって中国社会に適応させるか」という問題意識を三自愛国教会と共有している事を報告した。

しかし、体制外教会が世俗権力と癒着した神学を斥けたとしても、はたして本質的に彼らの本色化の試みは、神学／聖書解釈の方法論的に、体制内教会の本色化と違いがあるだろうかという疑問が残る。また、その神学的なナイーブさは、政治権力の方針次第では、体制に容易に取り込まれる危うさを持つ。漢民族以外の少数民族におけるキリスト教本色化という課題、また本色化運動の「主体」の問題も含めて、あらたな理論的進展・洗練が期待される。その意味でも、体制内教会と体制外教会の今後の神学と思想の交流は多くの可能性を含んだものであるといえるであろう。

続いて、李省展氏が東アジア、特に韓国におけるミッション高等教育の可能性につ



いて発題した。李氏はまず、従来の宣教史研究が国家の枠組みを意識的・無意識的に前提としてきたことを指摘し、それに代わるアプローチとして、「東アジア的パースペクティブ」、すなわち東アジア地域のキリスト教宣教と受容をトランスナショナルにみていくことを提案する。李氏の研究は、その視点に立つことで、国家的枠組みで研究されてきた帝国主義諸国、とりわけ日本帝国の様相がさらに浮き彫りになることを示している一例であると言うことができるだろう。国家とキリスト教団体の対立の構図は日本国内でもみられ、1940年代前半には、それは次第に宣教団体も含めたキリスト教団体の天皇制国家への従属という構図となってあらわれる。一方、植民地朝鮮・台湾では、ミッションスクールは日本帝国のさらに「露骨な植民地主義」を経験することになる。そして、神社参拝を拒否するのがあるいは受容するののかといった問題に対して具体的な決断をせまられるのである。その結果、同じ米国長老教会内でも朝鮮の平壤とソウルでは別々の決断をしていくことになる。

李氏の発題をうけて、コメンテーターの洛雲海氏は、植民地朝鮮で日本帝国の政策である神社参拝をうけ入れた宣教師の心情を細かく分析することで、同様な事態が今日の教会に起こった場合に宗教団体、教育機関、あるいはそこに属する個人は政治権力に対してどのような態度をとりうるであろうかと問いかけた。同時に、「宗教教育の自由」を保証する指定学校制度を制定した植民地総督府の思惑が、その制度によってミッションスクールを制度内に組み込み、統制することであったであろうと指摘する。そして、国家権力によって存続が脅かされる経験、また、制度内に組み込まれるとい

う歴史的経験を通して、宣教師とミッションスクールは自らの存在の性質と意義を問われたのであった。

これまでの二つの発題が世俗の権力、特に、近代国民国家、さらに帝国主義国家の権力とキリスト教の問題を中心に取扱ったのに対して、森本あんり氏は、東アジア神学の発展が、「正統形成の過程」という文脈の中に位置づけられるとして、「アジアから神学を問う、アジアを手段として神学を行う」行為の神学理論を展開した。森本氏は「歴史概念としてのアジア」がヨーロッパの宗教史学でどのように定義されたかを概観した後、「正統」の根拠、正統とされる神学的営みの手段、そして、「正統」の生成過程へと論を進め、「正統」であるとされるものが実は不特定であり、ゆえに「正統」は「寛容」であると述べる。アジアの「奪格の神学」も、キリスト教神学である限りこの歴史的な正統形成の文脈にあることを強調した。

コメンテーターの寺尾寿芳氏は、森本氏の議論に添って、すでに始められている神学の「脱ギリシャ化」を日本の宗教哲学的文脈から例を挙げて検討した。そして、正統は、永続的に、おのずとつくられるものであることを確認し、「Anathema」は最大外周を囲う論理であるという点で森本氏に同意した。一方で、「Anathema」が発動する際の非可逆性についても言及し、宗教対話の将来への展望を述べた。

総合討論では参加者からの積極的な質疑があり、発表者、コメンテーターの応答がなされた。森本氏がのべたように東アジアは「キリスト教の歴史的展開の最先端という歴史地理的な位置」にあり、東アジアにおけるキリスト教は欧米で伝統を築いてきたキリスト教とは多くの点で異質な課題を

かかえている。その多様で活発な神学的議論は、国を超え、宗教的枠組みや伝統、さらには神学という学問的枠組みを超えたものとならざるを得ないだろう。その営みの一つとして、南山宗教文化研究所という多様な宗教研究が行われる場所での今回のシ

ンポジウムは、今後のキリスト教研究の発展へ向けた小さな一歩として、大きな意義をもったものであったと言えるのではないだろうか。

むらやま・ゆみ
南山宗教文化研究所客員研究所員